

令和8年6月24日

人間文化研究機構総合地球環境学研究所長の選出について

大学共同利用機関法人人間文化研究機構では、総合地球環境学研究所長 山極壽一氏の任期が令和9年3月31日で満了することに伴い、選考を行った結果、新所長に国立研究開発法人森林研究・整備機構前理事長 中静透（なかしずか とおる）氏を選出しましたのでお知らせします。

なお、新所長は、機構長が令和9年4月1日付けで発令し、任期は4年となります。

[解禁：令和8年6月24日（水）14時00分]

<問い合わせ先>

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
事務局総務課長 石井伸宜
直通電話 03(6402)9209

総合地球環境学研究所
管理部長・広報室長 佐藤秀雄
直通電話 075(707)2110

略 歴

中 静 透
昭和31年3月8日生

昭和53年 3月 千葉大学理学部卒業
同 55年 3月 千葉大学大学院理学研究科修士課程生物学専攻 修了
同 58年 3月 大阪市立大学大学院理学研究科後期博士課程生物学専攻
単位修得退学
同 58年12月 理学博士学位取得（大阪市立大学）
同 59年 4月 日本学術振興会 奨励研究員
平成 6年10月 農林水産省林野庁森林総合研究所 主任研究官
同 7年10月 京大大学生態学研究センター 教授
同 13年 4月 総合地球環境学研究所 教授
同 18年 4月 東北大学大学院生命科学研究科 教授
同 28年10月 総合地球環境学研究所 プログラムディレクター・特任教授
令和 2年 4月 国立研究開発法人森林研究・整備機構 理事長
森林総合研究所 所長

※専門分野

森林生態学・生物多様性

※主な研究業績

・中静 透・河田雅圭・今井麻希子・岸上祐子（編著）2018. 生物多様性は復興にどんな役割をはたしたか. 地球研叢書、昭和堂出版.

・中静 透. 2018. 森林の変化と生態系サービス. 中静 透・菊澤喜八郎（編）「森林の変化と人類」森林科学シリーズ第1巻, 共立出版, 211-244.

・中静透. 2004. 「森のスケッチ」東海大学出版会, pp. 236.

・Nakashizuka, T. & Matsumoto, Y. (eds). 2002. Diversity and Interaction in a Temperate Forest Community. Ogawa Forest Reserve of Japan. Ecological Studies 158, Springer, Tokyo. pp. 319.

・Nakashizuka, T. & Stork, N. (eds.) 2002. Protocols for Biodiversity Research. Kyoto University Press, Kyoto. and Trans Pacific Press, Melbourne. pp. 209.

※受賞歴

- ・平成15年3月 日本林学会賞（日本林学会）
- ・平成16年2月 松下幸之助 花の万博記念賞（団体受賞）
- ・平成19年4月 みどりの学術賞（内閣府）
- ・平成23年3月 日本生態学会賞（日本生態学会）

【別添】次期所長に選定された中静透氏から寄せられたコメント文

総合地球環境学研究所の所長就任にあたって

このたび、総合地球環境学研究所の次期所長に選んでいただきました、中静透です。

2001年の4月に地球研が誕生した時、私も教授の一人として赴任し、私自身でもプロジェクトを一度させていただきました。その後は大学に移りましたが、2016-2020年にはプログラムディレクターを務めさせていただいたので、今度で3回目の地球研となります。



地球研の歴史も四半世紀を超え、進行中を含めてこれまでに50以上のプロジェクトが行われており、それらに参加された研究者もかなりの数にのぼります。当初から目指した文理融合研究は、初期にはディシプリンの激しいぶつかり合いを経験しながらの壮大な実験だったと思います。さらにステークホルダーを巻き込む超学際研究も、その先頭を走りながら試行錯誤を繰り返してきたと思います。こうした研究のやり方は、次第に研究者社会でもその必要性や重要性が、ある程度認められてきたように思いますし、地球研で若い時期をすごした研究者の中には、その経験を生かして活躍されている方も少なくありません。

しかし、一般的には、依然として研究手法や評価などの難しさのため、学際・超学際研究に対する理解が十分とはいえない状態が続いていると思っています。個々の地球環境問題に対する理解や認識は最近30年間で大きく進んできたものの、温暖化や生物多様性、循環経済、あるいは地域の問題などがそれぞれ関連性を持って同時解決されることの重要性が注目されています。一方で、最近の地政学的な不安定性の中で、ゆらぎも見られます。こうした状況の中で、みなさまのご指導を受けながら、地球研の進む道をあらためて議論し、存在意義を高めていきたいと考えております。どうぞ、よろしく申し上げます。